回　覧

令和８年10月31日
上町西町会 自主防災会
会長　安部賢二

「安否確認情報」 訓練の結果について

表記の件、LINE登録者を対象に９月２０日実施した結果、６０名が参加されました。その結果、救助を求めている人や災害時の安否確認、情報共有化が図られることが確認できました。また佐野市危機管理課へ情報をメールで送信し状況把握に効果的との評価を戴きました。佐野市町会長連合会ではFacebookに配信され,高い活動評価をいただいております。

アンケート調査では９７%がこのシステムはありがたいとの評価でした。今後は、例年９月１日,防災の日に継続的に訓練を実施する予定です。ご協力ありがとうございました。

「共助」の重要性

→災害が起きた時、最初に頼りになるのは「隣の人」です。

大災害が起きた、能登半島地震、熊本地震等で停電した時、水を運んでくれたのも、充電器を貸してくれたのも、食料を分け合ってくれたのも、すべて「顔は知っている」近所の人たちでした。

1995年の阪神・淡路大震災では、倒壊した家屋の下敷きになった人が、どのように救助されたかが、詳しく調査されています。**自力での脱出が34.9%、家族による救助が31.9%、友人・隣人による救助が28.1%。**一方、専門の救助隊による救出は、わずか1.7%にとどまりました。

つまり、**命を救う最初の力の、実に97.5%は、住民どうしの「共助」だった**のです。

大規模な災害が起きた直後、公的な救助がすぐに現場に到達することは、どうしても難しい。その「空白の時間」を埋められるのは、**隣に住む、顔見知りの人だけ**だということです。

町内会として、回覧板を回したり、ゴミ置き場の管理や、清掃後のミーティング、夏祭りの準備をしたりしての活動であまり注目されることのない存在かもしれません。

そして普段より町内会は、防犯パトロールや防犯灯、防災備蓄品等の管理などを通じて、**災害に強いまちづくり**を支えています。

普段の「回覧板」や「夏祭り、前夜祭」実は、いざという時に「あの人だ」と気づき合える関係を、活動をとおして築きあげる仕組みもあるわけです。

断水した時の水、停電した夜に、答えられるのは、**「日頃から、顔を合わせていた人たち」でありここに「共助」の重要性**が理解できると思います。